

研究結果報告書

日韓における詩劇運動に関する研究
— 古典の自覚を中心に —

所属： 檀国大学校 日本研究所
役職： 学術研究教授
氏名： 金 静熙

本研究は、詩と劇(演劇)の融合をめざし、文学や演劇分野で起こった芸術運動が日本から朝鮮(当時)に輸入された過程を分析し、また、この運動が両国において如何に展開されたかを考察するためのものである。1年6ヶ月間の研究を通して次のような結果が浮かび上がってきた。

朝鮮における1920年代の詩劇運動については先行研究において、1) 国内の自発的な欲求、2) 中国の京劇の影響、3) 日本からの影響が指摘されてきた。とくに3) 日本からの影響については、1918年の『初春の悲哀』が少女歌劇と呼ばれたものの、我が国の最初の詩劇であるという主張については懐疑的である。なぜなら、日本の詩劇である『哀楽児』が韓国に紹介されたのは1924年のことだからである。しかも、『初春の悲哀』と題する作品が詩劇と意識して作られたかについても極めて不透明である。また、国内における自発的な欲求というものの意味合いが不明確である。調査の結果、詩劇というジャンルが意識された根底には、当時演劇界や文学界における日本を通しての西洋文芸への関心が高まった背景があると判断される。したがって、本研究では1920年代における詩劇の発生は日本から輸入された西洋文芸に関する刺激と理解の深化に伴い、それをパンソリという我が国の伝統を見つめ直すことによっても起こったと考える。

1950年代の日本における詩劇運動は文学界や演劇界におけるリアリズムへの偏向に対する不満によって起こっている。その代表的な活動を行ったのが岸田国士を中心とした「雲の会」であるが、この会の活動は3年で終了符を打つ。その後、本格的な詩劇運動が、復活、展開されたのは、1956年前後であることがわかった。この時期には多くの雑誌が特集を組んで詩劇について論じているが、とくに議論の中心になっているのは「はたして詩劇とは如何なるものであるか」という定義そのものである。多くの人が自分なりの見解を披歴してきているものの、結局纏まらなかった定義には至っていない。この人が議論の中で注目すべきは、古典芸能の中でも特に能楽に注目している人が多くいたこと、そして、それに最も積極的な主張を展開したのが山本健吉であったことである。

1960年代、韓国における詩劇運動は文学界の抒情詩への集中に対する批判、ラジオやテレビなどの新しい媒体の発達によるものである。しかし、これにはやはり海外、とくに時期的にみて日本における詩劇運動の復活と、何らかの関係があると考えられる。というのも、日本における詩劇運動の内容もラジオやテレビに関して極めて強い影響を受けたものであったからである。ところが、残念ながら、现阶段ではこれを裏付ける確実な資料は見つからず、これについては今後の課題にしたい。

この時期の我が国の代表的な詩劇作家は、シン・ドンヨプ、チャン・ホないどで、彼らもやはり日本と同様に詩劇の定義について様々な議論を重ねてきた。しかし、それも結局纏まっていなかった。したがって、定義の数が多いだけ、多くの人に認められる詩劇の創作には限界があったことを露呈していると思われる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「1950年代の詩劇運動と伝統劇—近代以後の西洋文化の受容とその反省—」『日本学研究』第45輯、2015. 5

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)